

# 良子さんの ほっと一息ティータイム

豊かな思考の幹が育つ大地 Vol.4

熊谷良子

自己肯定感はどのようにして育っていくのでしょうか。  
子どもは、自分で見たい、触りたいと「興味の指さし」や  
もっとほしい、これがいい、あっちへ行きたいと「要求の指さし」をみせます。  
また、これは何？と「質問の指さし」だけでなく、「ワンワンはどこ？」と尋ねると、  
「応答の指さし」でイヌを指します。自分の発見や喜びを他者と共有しようと興味の対象へ  
関心を向けるための「叙述の指さし」をして、子どもは伝えたい人と対象物を交互に見ます。  
このように、1歳前後の子どもは、「指さし」を駆使しながら、コミュニケーションカの土台を築いています。  
意思表示としての言葉だからこそ、自分の思いや主張が通らなかった時の落胆は大きく、  
大人の目には「ダダこね」や「反抗」に映る態度になるのです。  
子どもの言葉の誕生が、豊かな思考の幹に育つためには、  
子どもの指さしや言葉に受容と共感と言葉を添えて応えてくれる大人の大地が必要です。  
自己肯定感が育つときには、芽生えた自我をまるごと喜んでくれる懐の深い大人を求めます

